



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第二四号）

清明

四月五日

横輪桜

神風の森しづかなり伊勢桜

波翠

俳人が詠んだ伊勢桜は、固有の名なのか、伊勢で咲く桜なのかわかりません。自生種・園芸種を含めて日本の桜は数百種類にのぼりますが、地名を冠するものも多く、全国各地で見られる染井吉野^{そめいよしの}ももとは明治初期、東京の染井村（豊島区）で作られた品種。近頃よく聞く早咲きの河津桜^{かわづ}をはじめ、伊勢にも特性調査の結果、平成二十三年に新しい園芸品種と認定された（日本花の会）横輪^{よこわ}町に咲く横輪桜があります。横輪桜は今から百五十年前の江戸時代、町内の桂林寺^{けいりんじ}にあったのを町民が持ち帰り、広まったと伝わります。染井吉野より二、三倍大きく、濃いピンク色の花びらが特徴で、年を経るごとに花びらの数が増えることもある珍しい木も。今では地元^{じもと}の努力もあって二千本を数えるまでになりました。染井吉野より花期が遅いので、内宮前の五十鈴川の桜を愛でた後でもゆつくりと観賞できます。

平安時代から、花といえは桜を指してきた日本人。とにかく花に関する季語が多いのです。

咲き始めたばかりの一輪二輪の花を「初花^{はつはな}」と呼び、満開は「花盛り」「花明り」、曇っていれば「花曇り」、雨が降れば「花の雨」、夜ならば月も「花月夜」とさまざまな状況で花を楽しんでいることがわかります。

そして花が散り始めても「散る桜」「落花」とその風情を愛してきました。桜花が風に散り乱れるさまを吹雪にたとえた「花吹雪」、水面に重なって流れる花びらを筏^{いかだ}に見立て「花筏」。最後に桜の花が散った後で葉^はが散って落ちることを「桜葉降^{さくらしべ}る」といいました。今年は俳人の目になって、さまざまな桜を堪能したいものです。

文 千種清美

